

オツベルと象（宮沢賢治）

一 作者と作品について

作者の宮沢賢治は一八九六（明治二九）年に生まれた詩人・童話作家である。岩手県の質屋に五人兄弟の長男として生まれ、幼い頃から童話と鉱物蒐集を好んだ。一九〇九年旧制盛岡中学校に入学、同校の先輩にあたる石川啄木らとの出会いにより、文学への深い関心を広げる。また同校を卒業してすぐ妙法蓮華経に出会った賢治はこれに強い感銘を受け、のちの彼の思想や信仰に大きな影響を与えるきっかけとなった。卒業後は上京し執筆活動にいそしんだが、妹トシの病状悪化を受け岩手に帰還、看病をしながら花巻農学校にて教師を勤めた。しかし一九二二年妹トシは病死、賢治の良き理解者であった妹の死は、以降の彼の作品に特有の陰影を落とすようになった。

一九二四年には詩集『春と修羅』、イーハトーブ童話『注文の多い料理店』を出版。賢治が生前に刊行した作品は以上の二点のみである。

一九二四年後半から患い始めた急性肺炎が小康を得た一九三一年、賢治は手帳に「雨ニモ負ケズ」を書き留め始める。一九三三年悪化した肺炎により死去。享年三七歳。

「オツベルと象」は、一九二六年一月に雑誌『月曜』創刊号に発表された。宮沢賢治に短編童話としては珍しく、生前に発表された作品である。作品自体は『「ある牛飼い」が物語をする』という形式をとつ

井上 小夜、梅本 航希、尾白 いくみ

ており、その物語とは、地主オツベルの下に迷い込んだ白象についての話である。重労働を課された白象は、初めこそ労働を楽しんでいたものの、日に日に与えられる食べ物を減らされていったため、衰弱してしまふ。そんなある日、白象は月の助言により仲間たちへ手紙を書く。その手紙を読んだ仲間の象たちが、白象を解放すべくオツベルの下につめかけ、助け出すことに成功する、というストーリーとなっている。

教科書には、昭和二八年に教育出版『中学国語（総合）一の上』や東陽書籍『ことばの生活（文学の本）二年』に初めて掲載された。以来、昭和三七年の教育出版『標準中学国語Ⅰ』から昭和四七年の『標準中学国語Ⅰ』までの一〇年間は同じ宮沢賢治の『よだかの星』が収録されたものの、現在平成二四年『伝え合う言葉 中学国語』では一年生の教材として再び採用されている。戦後から現在に至るまで長期間採用されている点、一度教材から外れたものの再び採用された点などから見ても、高い評価を得た作品であるといえる。

教材としては、「なぜ『牛飼い』が語るという形式をとっているのか」「最後の場面で『白象が寂しく笑って』いたのはなぜか」「最後の一行『おや、川へはいっちゃいけないいたら』とあるのはどういう意味か」という議論が多くなされている。

二 叙述について

……ある牛飼いが物語る。

物語の語り手として「牛飼い」が登場する。話の始まりを示す役割を果たす。

第一日曜

稲こき機械の六台も据えつけて、のんのんのんのんと、おおそろしない音をたててやっている。

「六台も」とあることから、予想より多い台数をオツベルが所持していることがわかる。その様子を「のんのんのんのんのん」という擬音語で表現している。「おおそろしない音」は脚注では「ひどくおおきな音」の意であると説明している。

十六人の百姓どもが、顔をまるつきり真っ赤にして足で踏んで機械を回し、小山のように積まれた稲をかたづけしからこいていく。

「百姓ども」の表現は、「百姓たち」に比べると百姓を見下している叙述だといえる。「まるつきり真っ赤に」という描写からは、必死で労働をこなす「百姓ども」の様子が想像できる。「小山のように」積まれた稲からは、オツベルの収穫量、ひいては経済力・財力を想像することもできる。

その薄暗い仕事を、オツベルは、大きな琥珀のパイプをくわえ、吹き殻をわらに落とさないよう、目を細くして気をつけながら、両手を背中に組み合わせて、ぶらぶら行ったり来たりする。

「薄暗い仕事場」から、労働の過酷さをイメージすることができる。「大きな琥珀のパイプをくわえ」たオツベルは、財力のある人物であることがわかる。「目を細くして」という表現からは、「嬉しそうな様子を表す」という慣用句の意味と、「疑りぶかくしながらよく見る」という様子を叙述したものと、どちらも解釈が可能である。「ぶらぶら行ったり来たりする」という表現では、何をするわけでもなく、手持ち無沙汰でうろろろする様子が描写されている。

小屋はずいぶん頑丈で、学校ぐらいもあるのだが、なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回ってるから、のんのんのんふるうのだ。

「ずいぶん頑丈」「学校ぐらいも」とあることから小屋がかなり大それた造りをしていることがわかる。それでも、「新式稲こき六台」が回っているために、「のんのんのん」ふるっているのだというので、稲こき作業の規模の大きさがわかる。それに併せて、「新式」とあることから、オツベルの経済力が読み取れる。

とにかく、そうして、のんのんのんやっていた。

「とにかく」は、先述の内容（オツベルの食事）の話は一旦置いておく、の意。「のんのんのん」には擬態語と擬音語の両方の意味がある。

白い象だぜ、ペンキを塗ったのでないぜ。

文末「くぜ」は牛飼いが語りかける表現が使われている。「ペンキを塗ったのでない」とあるが、白象という存在はペンキを塗って偽装したと疑うほど珍しい存在であるのだとわかる。

そいつが小屋の入り口に、ゆっくり顔を出した時、百姓どもはぎよっとした。

「そいつ」は白象のことを指す。「ぎよっと」という表現からは、百姓どもが非常に驚いた様子を表している。

ところがその時オツベルは、並んだ機械の後ろの方で、ポケットに手を入れながら、ちらっと鋭く象を見た。

オツベルは象を「ポケットに手を入れながら」「ちらっと」見ただけである。よっぽど冷静で落ち着いた様子であることがわかる。「鋭く見た」というのは、労働力として扱えることを見抜いていたのかもしれない。

それからいかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた。

「いかにも」は「どう見ても、どう考えても」という意味があり、露骨に退屈そうな様子を表していたのだと読み取れる。「わざと大きなあくびをし」た後は、依然冷静に「両手を頭の後ろに組んで、行ったり来たりやっていた」のである。

そしたらどうとう、象がこのこの上がってきた。

「どうとう」には、時間がたったが最終的に、という意味がある。「このこ」という様子からは、「どしどし」や「ずんずん」に比べると比較的ゆっくり歩み寄ってくるイメージを受ける。

象はいかにもうるさいらしく、小さなその目を細めていたが、またよく見ると、確かに少し笑っていた。

先述の「いかにも」と同様の表現であり、どう考えてもみながら邪魔であるという様子がわかる。「小さなその目を細めて」というのは、慣用的な意味ではなく、その様子にいらいらしているのだから。しかし、「またよく見ると、確かに少しわらっていた」のであるから、その違和感ある表現が読者に読みを深めることを要求していく。

オツベルはやっと覚悟を決めて、稲こき機械の前に出て、象に話をしようとしたが、その時象が、とてもきれいな、うぐいすみたいない声で、こんな文句を言ったのだ。

「やっと」という表現から、時間の経過が読み取れる。「とてもきれいな、うぐいすみたいない声」という、象の声を他の動物の鳴き声に例えた表現がなされている。

象が体を斜めにして、目を細くして返事した。

「体を斜めにして」というのは、何かの感情の現れか、はたまた象の目が体の横についているためか。頻繁に「目を細くして」と登場するが、ここでの意味は「嬉しそうな様子を表す」ものである。

オツベルが顔をくしゃくしゃにして、真っ赤になって喜びながらそう言った。

「顔をくしゃくしゃに」「真っ赤になって」とあるように、よっぽど象を労働力として得られたことが嬉しかったのであろう。

どうだ、そうしてこの象は、もうオツベルの財産だ。

「どうだ」という呼びかけは、「牛飼い」のセリフであろう。「もう」という叙述からは、事態がすっかり完了してしまった様子が現れている。

第二日曜

けれどもそんなに稼ぐのも、やっぱり主人が偉いのだ。

象の見かけの美しさや力強さを賞賛しながらも、結局はオツベルの手腕を褒め称えている。

丸太で建てたその象小屋の前に来て、オツベルは琥珀のパイプをくわえ、顔をしかめてこうきいた。

時計はカモフラージュで、本当の狙いは象に鎖をつけることである。自分の狙いが表情からばれないよう顔に力を入れていたため、オツベルは顔をしかめているのか。また象を捕まえてから一週間で「丸太で建てた象小屋」を作り上げているところからも、オツベルの象を決して逃がさないという意思が見える。

象が笑って返事した。

本来野生の動物に時計は無用の長物である。

オツベルは顔をしかめながら、赤い張り子の大きな靴を、象の後ろのかかにはめた。

前述とは違い、一度思惑が成功しているオツベルが緊張していると考えにくい。自分の狙い通りに進みほくそ笑みそうになる表情を抑

えているため、しかめつらしい顔になったのではないか。

次の日、ブリキの大きな時計と、やくざな紙の靴とは破け、象は鎖と分銅だけで、大喜びで歩いておった。

やくざな、とは役に立たないこと。赤い張り子靴が靴の役目を果たさないことをオツベルは最初から分かっていた。この描写からは、まんまとオツベルの思惑に嵌ったことに気付いていない白象を揶揄するような目線が感じられる。

オツベルは両手を後ろで組んで、顔をしかめて象に言う。

「両手を後ろで組んで」とあるが、腰のあたりで組むのか、肩の上からまわして首のあたりで組むのかで動作が異なってくる。後者だとすると両手を頭上にあげるのはお手上げのときのポーズである。またどうしようもなく困ったときに頭を抱えることもある。オツベルは頭に手を置き、顔をしかめてみせることで、象に力仕事を頼むことを申し訳なく思っているように見せている。

象は目を細くして喜んで、その昼過ぎに五十だけ、川から水をくんできた。

象は働くことに喜びを感じている。オツベルの思惑と、象の喜びようが対照的である。また五十だけ、とあることから象にとって今回の仕事はたいした負担ではなかったことが伺える。象の力強さと同時に、利用価値の高さも読み取れ、これから更に仕事が重くなるだろうことが暗示されているように思える。

夕方象は小屋にいて、十把のわらを食べながら、西の三日の月を見て、「ああ、稼ぐのは愉快だねえ。さっぱりするねえ。」と言っていた。

象が仕事の報酬として初めてわらを与えられ、稼ぐ（仕事をする）

ことを痛快に感じてわらを食べていることがわかる。わらの量は十把。

『把』は『束』と同義。空には三日月がかかっている。仕事初日。

オツベルは房のついた赤い帽子をかぶり、両手をかくしに突っ込んで、次の日象にそう言った。

房のついた赤い帽子は、肉体労働の場では不釣合いに派手な代物である。税金云々は真つ赤な嘘で、オツベルは贅沢で派手な生活を送っている。

オツベルは少しぎよつとして、パイプを手から危なく落としそうにしたが、もうその時は、象がいかにも愉快なふうで、ゆっくり歩きだしたので、また安心してパイプをくわえ、小さなせきを一つして、百姓どもの仕事のほうを見に行った。

象が「森に行くのが好き」だと言ったことを受けて、象が森へ帰りがたがるかと思つてぎよつとした。象が本気で帰りがたがったら、今はまだ象を引き止める力がこちらにないことを分かっているので恐れた。しかし象はそんな素振りを見せなかったため安心し、緊張を緩められためにひとつ咳をして一息ついた。

晩方象は小屋にいて、八把のわらを食べながら、西の四日の月を見て、「ああ、せいせいいした。サンタマリア。」と、こう独り言したそうだ。

わらの量は八把。少し減っているが、象は気にする様子もなく、仕

事に対して満足感を感じている様子がわかる。月の描写から仕事を始めてまだ二日目。

「ああ、吹いてやろう。本気でやったら、ぼく、もう、息で、石も投げ飛ばせるよ。」

不自然に読点が多く打たれている。子どもが声を弾ませているような無邪気なリズム感とともに、幼さゆえの論理性の崩壊が感じられる。

その晩、象は象小屋で、七把のわらを食べながら、空の五日の月を見て、

「ああ、疲れたな、うれしいな、サンタマリア。」とこう言った。

わらの量は七把。また少しオツベルによって減らされていることが、具体的な数値から読み取れる。ここでの象は「疲れた」と言っているものの、働きがいを感じ、心地よい疲労感を味わっている様子がわかる。月の描写から仕事を始めて三日目。

どうだ、そうして次の日から、象は朝から稼ぐのだ。わらも昨日はただ五把だ。

わらの量は五把。大きな変化ではないものの、毎日着実にわらの量が減っている。「ただ五把」の表現は、五把のわらは、さらなる重労働を課されたこと、象が働くために食べる量にしては少ないことを表す。

第五日曜

オツベルかね、そのオツベルは、俺も言おうとしていたんだが、いなくなつたよ。

オツベルは「死んでしまった」とは言わずに、「いなくなつた」と表

現する。オツベルが象に潰されて死んでしまう場面でも、「死ぬ」という言葉は使われていない。「死」という表現を意図的に避けたと考えられる。

仕方がだんだんひどくなったから、象がなかなか笑わなくなった。

オツベルは象に、だんだんと重くなる労働を課していったにも関わらず、えさとなるわらの量を日々減らして弱らせたということ。「なかなか笑わなくなった」の表現は、初めの象は嬉しそうに、笑顔で仕事をしていたことが推測できる。

ときには赤い竜の目をして、じつとこんなにオツベルを見下ろすようになってきた。

オツベルに対しての感情の変化。オツベルを嫌い、恨み始める。「赤い竜の目」という記述は、これまでにでてくる「赤」とも関連する強さ、強い意志を象徴する色ではないか。また、象の純粹さの喪失とも考えられる。素直にオツベルの言うことに従っていたが、オツベルにも仕事にも嫌気がさし始め、純粹に「稼ぐのは愉快」だとは思えなくなっている。

ある晩、象は象小屋で、三把のわらを食べながら、十日の月を仰ぎ見て、「苦しいです。サンタマリア。」

これまで働くことに意義を感じていた象が初めて「苦しいです。」と弱音を吐いた日。わらの量は三把。五把でも少ないと表現されていたが、さらにわらを減らされ、仕事を十分にできる状態でなくなっている。仕事を始めて八日目。

ある晩、象は象小屋で、ふらふら倒れて地べたに座り、わらも食べずに、十一日の月を見て、

「もう、さようなら、サンタマリア。」とこう言った。

とうとう仕事をする気力も体力もなくなり、死を予期した象が「もう、さようなら」と月に別れを告げる。「わらも食べずに」の表現は、『わらを与えてもらえず、食べられない』『多少のわらはあるが、もう食べる気力もない』のどちらの解釈もできる。仕事を始めて九日目。

こいつを聞いたオツベルは、象にことごとつらくした。

「ことごと」は「事毎」。事の大小を問わず、どんな場合でも同じ状態にすることの意。何事につけても。なんやかんや。どんな場面でも。「こいつを聞いても」であれば、「ことごと」は「ことごとく（徹底的に）」の意ととれる。しかし最初は「すまないが」と優しい言葉かけをしていたオツベルであったことから、象がだんだん弱ってくるのを見ても、オツベルが象に優しく接することはなかったととることができ

る。

月がにわかに象にきく。
「にわかに」は状態が一転する様子を表す。それまでの月の対応（静観）とは一変し、急に象に話しかけ象を助ける手伝いをする。

「お筆も紙ありませんよう。」象は細ういきれいな声で、しくしくしくしく泣きだした。

前述にもあるように、象はまだ幼く、あまり物事がわかっていない。

「ありませんよう」や「しくしくしく泣きだした」の表現から、自分ではどうすることもできない子どもの象であることがわかる。

赤衣着物の童子が立って、すずりと紙をささげていた。

「赤衣着物の童子」は菩薩の従者であるとの脚注があるが、オツベルを恨みはじめる白象の「赤い竜の目」の象徴とも考えられる。

林のような象だろう。

「林」という表現が、まとまったもの、かたまりというイメージ。森ほど大きいわけではなく、木ほど小さいわけではない。「…だろう。」は語り手の推測。「林のような象たちだったろう。」ではなく、百姓と一体化して語り手も同じものを見ている。

何ができるもんか。わざと力を減らしてあるんだ。

仲間の象が白象を助けに来ることを予想して、白象が自力では逃げ出す力をなくさせておいたことがわかる。一度手に入れた貴重な労働力を手放すまいとするオツベルの周到な狡猾さをうかがい知ることができる。

オツベルはもう支度ができて、ラツパみたいないい声で、百姓どもを励ました。

前述に同じく、オツベルの冷静沈着な性格、的確な指示を出す頭の良さをうかがい知ることができる。

こんな主人に巻き添えなんか食いたくないから、みんなタオルやハンケ

チや、汚れたような白いようなものを、ぐるぐる腕に巻きつける。降参をする印なのだ。

百姓どもはオツベルに雇われ、これまではオツベルの言うとおりに動いてきたが、ここで初めて「こんな主人」には従えないと、勝手に降参する。

オツベルはいよいよ躍起となつて、そこら辺りを駆け回る。

百姓どもが降参し、仲間のいなくなつた冷静なオツベルが「いよいよ」冷静でなくなり始めたことが読み取れる。

オツベルの犬も気がたつて、火のつくようにほえながら、屋敷の中をはせ回る。

「はせ」は「走つて」の意。オツベルの犬もつられて興奮しはじめ、行きつく場所もなく走り回る。

塀の中にはオツベルが、たった一人で叫んでいる。

普段から指示を出す百姓どもはどうにいたなくなつたため、誰に指示をするでもなく、「たった一人で」叫んでいる。恐怖のために気が触れてしまわないように大声を出していると考えられる。

オツベルの犬は気絶した。

オツベルの最後の味方であった犬までも、恐怖のため気絶してしまふ。これでオツベルは本当にひとりぼっちとなる。

さあ、オツベルは撃ちだした。

これまで防御のみであったが、ここからオツベルの象たちへの攻撃が始まる。「さあ」というかけ声は、まだオツベルが勢いをなくしていないことがわかる。

「なかなかこいつはうるさいねえ。パチパチ顔へ当たるんだ。」

白象がオツベルの仕事場へ現れた時、もみながら顔に当たることを「砂が私の歯に当たる」と表現していたものと同様。ここではピストルの弾であるが、象には全く通用していない。象という大きな存在を、オツベルは自分のものとし思い通りに動かしていたかのように見えた。しかしそれはオツベルの傲りであり、オツベルの小ささが際立つ描写となっている。

オツベルはケースを握ったまま、もうくしゃくしゃに潰れていた。

六連発のピストルを一度撃ち終わり、弾を入れ替えた途端、五匹の象に潰されてしまうオツベル。第五日曜の初めの「オツベルはいなくなつた」理由になる部分。

みんなは小屋に押し寄せる。丸太なんぞは、マッチのようにへし折られ、あの白象は大変痩せて小屋を出た。

丸太があたかもマッチのように容易くへし折られた様子から、象たちの威力を推し量ることができる。対照的に最初は元気に働いていた「あの白象」は、自分で小屋を出ることもできないくらいに痩せ細つた様子であることがわかる。

白象は寂しく笑ってそう言った。

助かったが寂しく笑う白象。助かった喜びではなく、自分の愚かさを笑うよりほかないことを表す。または、一時は世話になったオツベルの死を悼む気持ちともとらえることができる。

おや、川へはいっちゃいけないったら。

「……ある牛飼いが物語る。」という冒頭部分に呼応する唯一の部分。話の終わりを告げる役割を果たすと考える。

三 考察

(一) オツベルと牛飼い

原子朗の『宮沢賢治語彙辞典』によると、オツベルは「悪らつな搾取者、資本家の典型」とされている。対して白象は「資本家に搾取される労働者階級の象徴」のように描かれている。しかし、この物語の語り手である牛飼いは終始オツベルを絶賛し、オツベルを決して「悪らつな搾取者、資本家の典型」という見方はしていない。物語の語り手である牛飼いの存在を無視することはできない以上、オツベルを単なる悪者として片付けることもできない。牛飼いがオツベルを客観的な視点で称賛する場面・セリフから考察していく。

まず、第一日曜、第二日曜の場面はどちらも「オツベルときたらたいたもんだ」で始まり、物語中にこの表現は合計三回登場する。また、第二日曜の場面では「頭がよくて偉い」、第五日曜のオツベルが白象を酷使し、仲間の象が白象を助けにくる場面でも「オツベルはやっぱり偉い」と、オツベルを直接的に称賛する表現がある。

次に、主人公オツベルを紹介する表現を見ていく。オツベルは「大

きな琥珀のパイプ」をくわえ、「ずいぶん頑丈で、学校ぐらいもある」小屋を所有している金持ちである。しかも単なる金持ちではなく、「なにせ新式稲こき機械が、六台もそろって回っている」小屋の、大成功した経営者である。「昼飯時には、六寸ぐらいのピフテキだの、雑巾ほどあるオムレツの、ほくほくしたのを食べる」ことができる。ここまでの表現からは、オツベルに対しての嫌味な表現は一切なく、明らかにオツベルの手腕がすばらしいものであることがわかる表現しかなされてはいない。

オツベルの行動描写からも、オツベルが度胸があつて頭がよく、冷静沈着な判断のできる人物であることがわかる。第一日曜、白象が初めてオツベルの小屋へやってきたとき、オツベルは「ポケットに手を入れながら、ちらつと鋭く象を見て」、「なんでもないというふうで、今までどおり行ったり来たりしていた」。その後も、「いかにも退屈そうに、わざと大きなあくびをして、両手を頭のうしろに組んで、行ったり来たりやつていた」。それに対し、百姓どもは初めから「ぎよつとした」様子で、「息を殺して象を見」ることしかできない。オツベルは最後まで「知らないふうで、ゆつくりそこらにあるいていた」。結果、白象は「オツベルの財産」になった。オツベルが手に入れた白象は、力が「二十馬力」もあり、労働力として大いに期待できる。また「見かけが真っ白で、牙は全体きれいな象牙でできている。皮も全体、立派でじょうぶな象皮」である。このことから「いまに見たまえ、オツベルは、あの白象を、働かせるか、サーカス団に売りとばすか、どっちにしても万円以上もうけるぜ。」と、オツベルのさらなる成功を予期している。

第五日曜の仲間の象が白象を助けにくる場面では、昼寝中だったに

もかわならず、「眼をぱちちりとあいたときは、もうなにもかもわかつていた」とあり、「ラツパみたくない声で、百姓どもを励ま」す。それ以外にも前もって白象を弱らせておいたり、ピストルを用いて一人で応戦するなど、「やっぱり偉い」と称賛されるにふさわしい英雄のような行動が見られる。

これらの表現からは、オツベルが、白象をだまして少ない賃金で働かせた結果、仲間の象に報復される『悪者』には到底見えないのである。

ではなぜ牛飼いは、オツベルをここまで称賛する立場に立つて物語をするのか。単なる悪者が成敗される物語として読まないときに、牛飼いが何者かを考える必要がある。オツベルを狡猾な金持ちと設定し、より悪い役を倒す話にすると、話は大いに盛り上がる。しかしそれは物語としての見方である。また牛飼いが単にオツベルを尊敬しているとは考えられない。オツベルの称賛に対して、牛飼いは白象の牙や皮をほめる以外、特に良くも悪くも評価していない。ここからオツベルが資本家であることを考えるとき、オツベルをほめることで資本主義を暗に肯定していると考えることができないだろうか。オツベルら資本家がいなければ、世の中は回らない。現在の日本を見れば、資本主義が正しい選択だったということを否定できないのではないか。資本家の崩壊を切り取った「オツベルと象」の、オツベルへの賞賛は、牛飼いの言葉を借りた資本主義への賞賛だと考える。

(二) 「オツベルと象」にみる経済観

「オツベルと象」において、結末で描かれているのは地主オツベルの死と解放された白象である。この結末から、「搾取する資本家の死」

「資本主義からの解放」を考えていきたい。

前述のように、語り手の牛飼いは、オツベルを「オツベルときたら大したもんだ」と評価する。また押しかけた象にひるむ百姓を鼓舞したオツベルに対し、「オツベルはやっぱりえらい」と、依然褒め称えた表現をしている。これらは、オツベルの経営手腕や攻めてくる象にひるまない勇敢さを誉めているのである。一方、第二日曜では労働の後、「せいせいした」「疲れたな、うれしいな」と働きがいを口にしていた白象であるが、第五日曜では「ときには赤い竜の目をして、じっとこんなにオツベルを見下ろすようになって」いる。資本家オツベルへの態度が、第二日曜と第五日曜で真逆のものになっているのである。

その後、そのオツベルに死が訪れる。過酷な労働を強いられ、搾取され続けていた白象の仲間たちによる報復をうけるのである。ここでの白象は、「労働者」のメタファーだ、とすることもできよう。白象の要請で呼ばれた仲間の象のおかげで、オツベルは死に白象は解放される。牛飼いから賞賛されていた資本家オツベルは、労働者の白象の手で殺されるのである。ここでのオツベルの死は「資本家の地位の崩壊」、白象の解放は「資本主義からの解放」と重ね合わせることができる。

しかし、ここで一つの疑問が浮かび上がる。資本主義を打破した結果、「労働者」はどこへ向かうのであろうか、ということである。宮沢賢治が、このような「資本主義からの解放」を作品の背景に潜ませた後、果たしてどうすればよいか、を明記していないのである。解放された白象が、その後どうなったか描かれずに物語が締めくくられたように。

ところで、先に述べた白象の「赤い竜の目」という描写について再度考えてみたい。資本家オツベルを見下ろす白象は、「赤い竜の目」を

している。この目は、資本主義に対する宮沢賢治自身の批判の目とも考えることができるだろうか。資本主義と対比する考え方として社会主義がある。労働者である白象の目を借りて、宮沢賢治は資本主義に疑問を抱いたのではないだろうか。

だが、対比する考え方である「社会主義」に対しても、宮沢賢治は同様に疑問を抱いていたのではないだろうか。この作品が描かれたのは一九二六年、社会主義国家の代表ともいえるソビエト連邦が成立したのは一九二二年である。結果論にすぎないのかもしれないが、ソビエト連邦は一九九二年に崩壊し、社会主義は理想的な経済の考え方はなかった、と結論づけられる。

仲間の象に解放された白い象は、「ほんとにぼくは助かったよ」と、「寂しそうに」笑うのである。資本主義を打破し解放された象だが、心から喜びを表現しているわけではない。また、最後の「牛飼いのセリフも印象的である。「おや、川へはいっちゃいけないたら」というセリフである。

川には、彼岸と此岸がある。それぞれ「社会主義」と「資本主義」のメタファーだと捉えるならば、資本主義から解放されても社会主義に向かわないように、というメッセージを投げかけているようにも読み取れるのである。

「赤い目」を持ち資本主義を批判する一方、その打破には「寂しい笑い」を浮かべ、社会主義に対しては「いっちゃいけない（はいっちゃいけない）」と述べる。宮沢賢治は、「経済」というシステムに疑問を抱き、「オツベルと象」にその思いを反映させたのではなからうか。宮沢賢治の言葉に「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」というものがある。これは、経済という考え方に限界

を感じた賢治の、心からの叫びであったのかもしれない。

(三) 牛飼いの視点

作中、牛飼いは終始オツベルを賞賛する立場にいる。オツベルを考察(二)の通り「資本家」「資本主義」のメタファーと捉えるならば、牛飼いは資本主義に好意的な目を向けている人物と言ふことになる。

ところでそもそも何故「牛飼い」はこの作品に登場したのか。ストーリーはオツベルと象によって進められ、牛飼いに触れる部分は作品の最初と最後のたった二行きりである。ストーリーには全く関与していない牛飼いの口から、何故この作品は語られなければならないのだらうか。

関与していないと言っても、牛飼いのオツベル賞賛という側面は、作中において非常に重要な役割を担っている。簡単なあらずじを述べれば、冷酷非道なオツベルに虐げられた白象が仲間の象たちに助けを求め、オツベルは象たちによって踏み潰されてしまうという一見悪人退治物語である「オツベルと象」の中において、牛飼いは終始オツベルを賞賛し続けることによって読み手に新たな視点を提示しているのだ。これは牛飼いから、更に言えば賢治からの「オツベルは本当に悪なのか？」という読み手への問いかけではないだらうか。この問いはオツベルにとどまらず、我々が日常表面的に「悪」と判断しがちなものへの、つまり我々の価値観へ疑問を投げかけているのである。ここで賢治は、牛飼いの口を通して固定観念からの脱却を図ろうとしたのではないかと考える。

では何故それが牛飼いの口から語られなければならないのかという最初の問いに戻ろう。物事に善悪の判断をつけるのは常に第三者

の目である。オツベルは決して「悪い雇い主」になろうとしたのではない。オツベルに「冷酷非道」というレッテルを貼り付けたのはあくまで当人以外の目である。つまりこの作品の善悪を語る為には、ストーリーに参与していない第三者の存在が必要だった。これが牛飼いの持つひとつの重要な役割である。

牛飼いが第三者としてストーリーと読み手との間に介在することによって生まれたもうひとつの側面は、言葉通り「オツベルは悪なのか？」という疑問である。よくよく読んでみると、オツベルの白象に対しての態度には非があるものの(重労働低賃金、ここでは食事)、有能な経営者なら誰しもが持つ非情さであり計算高さであり、オツベルを特別な悪者と捉える事の出来る表現がないことに気付く。従来特に労働者からは、資本家とは強欲で非道な人間と見られがちだが、そんな彼らの手腕なくして労働者は自らの働き口、つまり稼ぎを得ることが出来ないのもまた事実なのだ。労働農民党の有力献金者であった賢治は、労働者の叫びを聞きつつもその矛盾に気付き、牛飼いの口を以て「資本家は必ずしも悪ではない」と語りかけているのではないだらうか。

ここまで牛飼いによるふたつの側面を提示してきたが、いずれも牛飼いの口を借りた賢治自身の主張であることがわかってもらえるとと思う。つまり牛飼いと、賢治の代弁者なのだ。

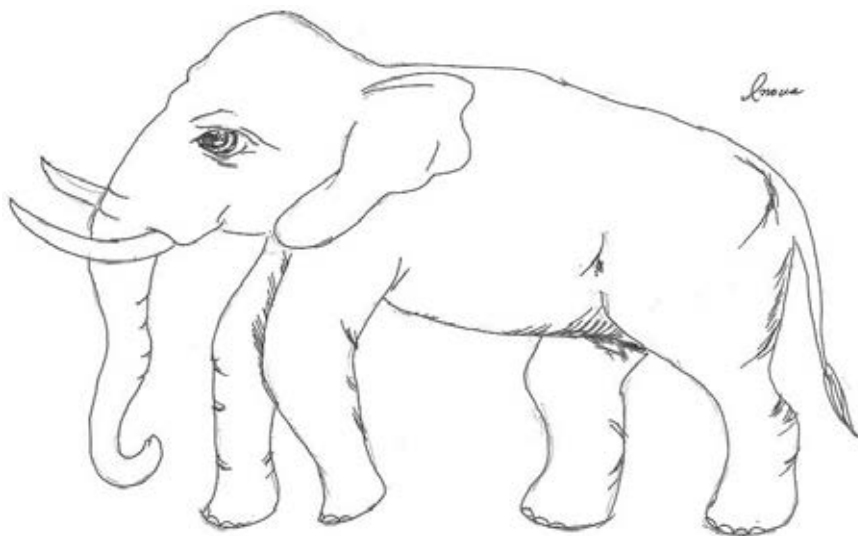
少し視点を変えて、賢治自身に目を向ける。賢治作品を語る上で忘れてはならないのが「イーハトーブ」の存在である。イーハトーブとは、賢治が故郷岩手をモチーフとして創り上げた理想郷のことであり、ほとんどの賢治作品はイーハトーブ内で進行している。勿論本作品も例外ではない。イーハトーブ内においては、全てのルール、価値観が賢治の創造あるいは理想に則っている。しかしそれらは単なる架空や

虚構ではなく、「心の深部に於いて万人に共通する」世界であり帰着点なのだ。賢治は「注文の多い料理店 広告文」の中で述べている。イーハトーブとは、目には見えないが確かに存在するものとして賢治は捉えていた。そうした「既に完成された世界」を語る中で、例えば本作品における牛飼いのように、賢治が自身を潜り込ませた作品というのは他にも存在する。例えば「グスコープドリの伝記」の主人公ブドリの生き方などは、賢治が尊んだ自己犠牲の精神を如実に体現したものであるし、「虔十公園林」の主人公虔十に至っては、イーハトーブ内であり得るべき賢治自身の姿を描いたものだといわれている。（諸説あり）

『日本文学学研研究資料業書 宮沢賢治』(有精社)の中で、賢治は「現実からの離脱と飛翔をはかり続けた理想家」と述べられている。資本主義と社会主義、善と悪、現実と理想など、賢治は一生をかけて本質的に対立するふたつの物事の調和と一致を模索した。その探究の原点であり軌跡であり、また終着点こそが「イーハトーブ」、理想郷なのだろう。つまりイーハトーブとは単に物語を生み出すための土台ではなく、宮沢賢治という人物を支えた内面世界であったといえる。しからば、イーハトーブから私たちに語りかけた牛飼いは、童話という幻想世界とこの現実世界の融和点を模索し続けた賢治自身の現し身といえるだろう。

【参考図書】

- ・大塚常樹『作家の随想 8 宮沢賢治』(発行年を記載、日本図書センター)



- ・『日本文学学研研究資料業書 宮沢賢治』(発行年を記載、有精社)
- ・中野登志美「宮沢賢治「オツベルと象」の教材性の検討―言葉の二重性という観点から―」(『広島大学大学院教育学研究紀要』、平成二十四年十月、広島大学大学院、p. 153-161)
- ・原子朗『宮沢賢治語彙辞典』(平成元年十月、東京書籍)